

調査報告

働くこととリカバリーに関する予備的調査

—量と質の両側面からの検討—

大川 浩子・遠藤 芳浩*・塩澤 まどか*・船本 修平*・本多 俊紀*

(2021年1月8日受稿)

抄録： 近年、パーソナル・リカバリーの中の客観的リカバリーの一つに就労が考えられている。しかし、先行研究において、就労とリカバリーの関係は量的手法と質的手法による結果が異なっている。今回、我々は、就労とリカバリーの関係を量と質の両側面から検討するために、就労している障害当事者に対し、自己記入式のアンケート調査とインタビュー調査を行い、検討した。

まず、量的な検討として UWES-J 短縮版と SISR-B を用いたが、両者の相関は認められなかった。また、質的な検討としてインタビュー内容を UWES-J 短縮版とリカバリーの段階 (SISR-A) を外部変数としてテキストマイニングを行った。その結果、ワーク・エンゲイジメントのレベルとリカバリーの段階ごとの文章の内容はポジティブ、ネガティブの割合が異なって現れることが示されたが、就労とリカバリーの関係を直接検討までに至らなかった。今後、就労とリカバリーの関係を検討するうえで、①就労のとらえ方、②リカバリーの定義をとらえ方、③研究協力者の協力した時期の3点が課題になることが考えられた。

キーワード：就労，リカバリー，テキストマイニング

I. はじめに

我が国に「リカバリー」が紹介されてから約20年が経過し、当初は否定的にとらえる意見もあった¹⁾が、現在では、リカバリーを基盤とするプログラムや支援技法が広がりつつある。「リカバリー」は一言で定義されにくく、現れ方は個人で多様であるも、「病気や健康状態の如何にかかわらず、希望を抱き、自分の能力を発揮して、自らが選択できるという主観的な構えや指向性」²⁾ともされている。

近年、「リカバリー」は疾患自体の回復を目指す「臨床的リカバリー (clinical recovery)」と、希望する人生の到達を目指すプロセスである「パーソナル・リカバリー (personal recovery)」に分けられ、就労はパーソナル・リカバリーの中の客観的リカバリーの一つに考えられている³⁾。

既に、就労はリカバリーのいずれの段階でも重要な役割を果たすことが言われており⁴⁾、日本でリカバリーを経験した障害当事者 (以下、当事者) において、彼らのパーソナル・リカバリーに最も影響したイベントは就労や就学であることが報告されている⁵⁾。従って、日本においても就労や就学が当事者にとってのパーソナル・リカバリーに重要であることが考えられる。海外の量的研究における就労者と非就労者のリカバリー尺度の検討では、就労者のリカバリー得点が非就労者を下回る構成要素があり、就労の有無がリカバリーに影響していないと言われている⁶⁾。この背景として、人によって就労 (働く) に対する価値観が異なること、リカバリーの現れ方が個人で異なることが考えられる。一方、質的研究に対するメタアナリシスでは就労がリカバリーに影響を与えると報

告されており⁷⁾、リカバリーに関する検討では質的手法による検証が重要となる可能性がある。つまり、我が国において就労とリカバリーに関する質的検討は重要な課題であると思われる。

そこで、今回、我々は就労する当事者のリカバリーと就労の関係について量と質の両面からの検討を行った。当事者に就労に関するインタビューを実施し、リカバリーおよびワーク・エンゲイジメントに関する量的尺度との関係について分析し、リカバリーと就労の関係について検討したので報告する。

II. 方法

本研究では、研究協力者に対し自記式調査票によるアンケートとインタビューによる調査を行った。研究協力者、調査内容と手続き、分析方法は以下のとおりである。

1. 研究協力者

研究協力者は、調査時点（2019年2～3月）で就労している当事者15名である。筆者らが関わっている就労支援に関するネットワークを活用し、個別に研究への協力を提案した。研究協力者の属性は表1の通りである。

表1 研究協力者の属性

性別	男性12名 女性3名
年齢	20代3名 30代6名 40代5名 50代1名
障害名	精神障がい9名 発達障がい5名 その他1名
勤務事業所の業種	医療・福祉6名 情報通信業3名 卸売業・小売業3名 教育、学習支援業1名 サービス業2名
雇用条件	正社員(一般)2名 契約社員(障害者雇用)3名 準契約社員(障害者雇用)1名 パート社員(障害者雇用)7名 非常勤1名 自営1名
勤続年数	1年未満5名 1～2年未満4名 2～3年未満2名 3年以上4名
年収	200万以下12名 200万～300万未満1名 300万～400万未満1名 無記入1名
経験 就労期間	1年未満3名 1～3年未満1名 3～5年未満2名 5～7年未満3名 7～9年未満2名 9年以上3名 無記入1名
経験職場数	5カ所未満8名 5～10カ所未満4名 10カ所以上3名

2. アンケート調査

研究協力者から研究協力同意を得た後、最初にアンケート調査を実施した。アンケート内容は、基本情報と就労に関する項目に加え、ワーク・エンゲイジメント、リカバリー、仕事への満足度に関する以下の尺度を含めた。

1) UWES-J短縮版⁸⁾：ワーク・エンゲイジメントとは、仕事にエンゲイジしている状態で情熱を持って働いている状態とされる⁹⁾。この測定にUWES-J短縮版を用いた。UWES-J短縮版は9つの項目に対して7段階（0～6）で評定し、一般的には総得点を項目数で除した値が用いられる。

2) 日本語版24項目版Recovery Assessment Scale (RAS)^{10) 11)}：「目標／成功志向・希望」「他者への信頼」「自信をもつこと」「症状に支配されないこと」「手助けを求めるのをいとわないこと」の5つのリカバリーの構成要素を評価し、合計得点が高いほどリカバリーの度合いが高いとされる。

3) 日本語版Self-Identified Stage of Recovery PartA, PartB (SISR-A,B)^{11) 12)}：SISR-Aは、Andresenらのリカバリーの5段階モデルをもとに開発された順序尺度であり、リカバリーの5つの段階からもっともあてはまるもの1つを選択する。また、SISR-Bは、リカバリーの4つの構成要素「希望を見出すこと」「アイデンティティの再確立」「人生の意味を見出すこと」「リカバリーの責任をもつこと」を評価する尺度であり、合計得点が高いほどリカバリーの度合いが高い。

4) 仕事満足度スケール¹³⁾：重度な精神障害者を対象とした仕事に対する満足度の包括的な尺度である（日本での妥当性は未確認）。全32項目であり、「全般的満足感」「給与」「進歩と安全性」「管理」「同僚」「今の仕事をどのように感じているか」の6つの要素から構成されている。

3. インタビュー調査

アンケート調査後に、研究協力者に対し60～90分程度のインタビューを行った。インタビューはインタビューガイド（表2）を作成し、実施した。

インタビュー内容はICレコーダーに録音し、終了後、逐語録を作成した。

4. 分析方法

今回、回答における欠損が認められたRASと仕事満足度スケールを分析から除き、UWES-J短縮版、SISR-A, Bを用いた。UWES-J短縮版とSISR-Bについては現職場での勤続年数（月数）を含めた関連性の検討にスピアマン順位相関係数を用いた。

また、インタビューデータについてはKH Coder（フリーソフト：3.Beta.02c版）によるテキストマイニングを実施した。テキストマイニングは、質的、量的研究の両者の性格を持ち、探索的研究、仮説検証的研究、仮説生成的研究の全てに有効である¹⁴⁾ため、今回、分析に用いた。手順は、インタビューデータ全体およびSISR-Aで示されるリカバリーの段階、ワーク・エンゲイジメントのレベルに関して、①頻出語およびリカバリーの段階、ワーク・エンゲイジメントのレベルにおける特徴語の確認、②共起ネットワーク（共に使われている語を繋ぐネットワーク¹⁵⁾）の分析、③対応分析（クロス集計の視覚化¹⁶⁾）を行った。①～③の結果をもとに注目する語を決定し、その語に

ついて、KWICコンコードダンス（特定の語を前後の文脈もあわせて表示する字引機能¹⁵⁾）を用いて検討した。

5. 倫理的配慮

研究協力者に、研究の目的と方法、個人情報の扱い、参加は任意であること、拒否した時の不利益はないことについて書面を用いて説明し、書面による同意を得た。アンケートは全て無記名で、個人番号で管理し、インタビューで語られた固有の名称（人名、事業所名）は、仮名に置き換えた。なお、本研究は北海道文教大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：30028）。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の結果

SISR-A, B及びワーク・エンゲイジメントの結果を表3に示す。なお、ワーク・エンゲイジメントのレベルについては、先行研究⁹⁾のレベルに従い、総得点が27点以下を低いレベル、28～35点を平均的レベル、36点以上を高いレベルと判断した。また、リカバリーの段階で成長期に該当した2名は、ワーク・エンゲイジメントについても高いレベルにあった。

なお、SISR-Bとワーク・エンゲイジメントの得点および勤続年数（月）について、相関は認められなかった。

表2 インタビューガイド

1) 現在の仕事について
・ 仕事内容：職種、雇用条件、勤続年数、平均勤務時間など
・ 職場環境：会社の規模や人数、物理的な環境や障害の開示（開示・非開示と範囲）、合理的配慮の配慮内容
・ 就職活動：実際の期間や受けた支援、就職活動で苦労した点・工夫した点、感じたこと、現在の仕事は希望の職種か
・ 就職後に継続的に受けている支援
2) 過去の就労経験について
・ 仕事内容：職場数と職種、就業期間など
・ 職場環境：仕事ごとの会社の規模や人数、物理的な環境や障害の開示（開示・非開示と範囲）、合理的配慮の内容
・ 離職理由：仕事を辞めた理由
・ 就職活動で受けた支援
・ 就職後に受けた支援
3) 利用した就労支援サービスについて
・ 利用した就労支援サービスと支援内容：役に立った支援、就労を阻害した支援、支援者の就労に対するスタンス（考え方）の影響、就職した仕事は希望の職種か、支援を受ける中で変わったのか
4) 就労前後の変化
・ 生活や意識：就労後の生活や意識における変化の有無と具体的内容
・ 仕事に対する価値観：就労に対する価値観の変化の有無と具体的内容

表3 各尺度に関する結果

尺度名	結果	
SISR-A (リカバリーの段階)	モラトリアム期0名 気づき期2名 (13.3%) 準備期4名 (26.7%) 再構築期7名 (46.7%) 成長期2名 (13.3%)	
SISR-B合計得点 (平均)	17.3±2.9	
ワーク・ エンゲイジメン ト	平均	3.7±1.1
	レベル	低い5名 平均的4名 高い6名

2. テキストマイニング

インタビューデータの総抽出語数は96,660語であり、そのうち助動詞、助詞を除いて使用されていた語は32,846語であった。

1) 頻出語と特徴語

全体の頻出語上位10位(表4)とリカバリーの段階、ワーク・エンゲイジメントのレベルごとの特徴語(表5)を示す。全体では文末表現に使われる動詞を除くと、「人」「自分」「仕事」「今」「行く」「働く」「会社」がよく出現していた。また、リカバリーの段階における特徴語では同様に文末表現に使われる動詞を除くと、気づき期で「形」「実際」「人」が、準備期では「結構」「会社」「一応」が、再構築期では「自分」「仕事」「人」が、成長期では「仕事」「形」「人」が上位に認められた。さらに、

ワーク・エンゲイジメントのレベルにおける特徴語においても、文末表現に使われる動詞を除くと低いレベルでは「仕事」「多分」「結構」が、平均的なレベルでは「仕事」「辞める」「結構」が、高いレベルでは「自分」「人」「今」が認められた。

2) 共起ネットワーク

最初に全体の共起ネットワーク(図1)を示す。全体の共起ネットワークは媒介中心性を示しており、色が濃い(中心部が黒い)ほどネットワーク構造の中で中心的な役割を果たしていることを示している¹⁷⁾。文末表現に使われる動詞を除くと「人」「話」「働く」において媒介中心性が高いことが示されている。

次に、外部変数であるリカバリーの段階(図2)、ワーク・エンゲイジメント(図3)と語の関係を

表4 頻出語上位10位

順位	抽出語	出現回数
1	思う	549
2	言う	496
3	人	475
4	自分	471
5	仕事	391
6	感じ	319
7	今	263
8	行く	237
9	働く	209
10	会社	146

表5 リカバリーの段階とワーク・エンゲイジメントのレベルにおける特徴語

<リカバリーの段階>

気づき期		準備期		再構築期		成長期	
形	.167	結構	.086	自分	.203	仕事	.105
実際	.112	会社	.059	言う	.177	形	.102
人	.103	一応	.041	仕事	.156	人	.099
今	.102	利用	.039	人	.152	言う	.095
部署	.098	部分	.038	感じ	.132	感じ	.093
思う	.093	就職	.036	行く	.116	自分	.089
話	.093	色々	.036	今	.114	思う	.088
店	.088	実際 そうです	.034	働く	.099	会社	.081
業務	.082	ね	.031	前	.070	行く	.073
言う	.074	上司	.031	話	.068	障害者	.069

<ワーク・エンゲイジメントのレベル>

低い		平均的		高い	
思う	.180	仕事	.157	自分	.191
仕事	.114	感じ	.133	思う	.178
多分	.082	辞める	.057	言う	.175
結構	.076	結構	.057	人	.154
実際	.062	悪い	.053	今	.133
前	.059	多い	.053	行く	.114
事業所	.057	時間	.051	働く	.102
多い	.054	事業所	.046	形	.077
考える	.054	上司	.044	前	.076
違う	.050	良い	.044	最初	.074

※数値はJaccard係数

描いた共起ネットワークを作成した。外部変数を用いた共起ネットワークでは、外部変数（四角で示されるリカバリーの段階やワーク・エンゲイジメントのレベル）に囲まれている抽出語は共通するテーマであり、周辺部に布置されている抽出語は特定の各段階やレベルにかかわりが深い語とされる¹⁶⁾。リカバリーの段階では、「仕事」「人」「今」「行く」は各段階で共通している抽出語であり、気づき期の「業務」「支援」「職場」「障害」と再

構築期の「見る」及び成長期の「聞く」「入る」「障害者」「プログラム」がかかわりの深い抽出語となっていた。一方、ワーク・エンゲイジメントでは「仕事」「自分」「働く」「会社」「行く」「人」「前」「話」はレベル間での共通性が高く、低いレベルの「実際」「違う」や平均的なレベルの「上司」「悪い」「良い」「辞める」「職場」「時間」「相談」と高いレベルの「形」「障害者雇用」「最初」「聞く」「見る」は関りに深い抽出語として示された。

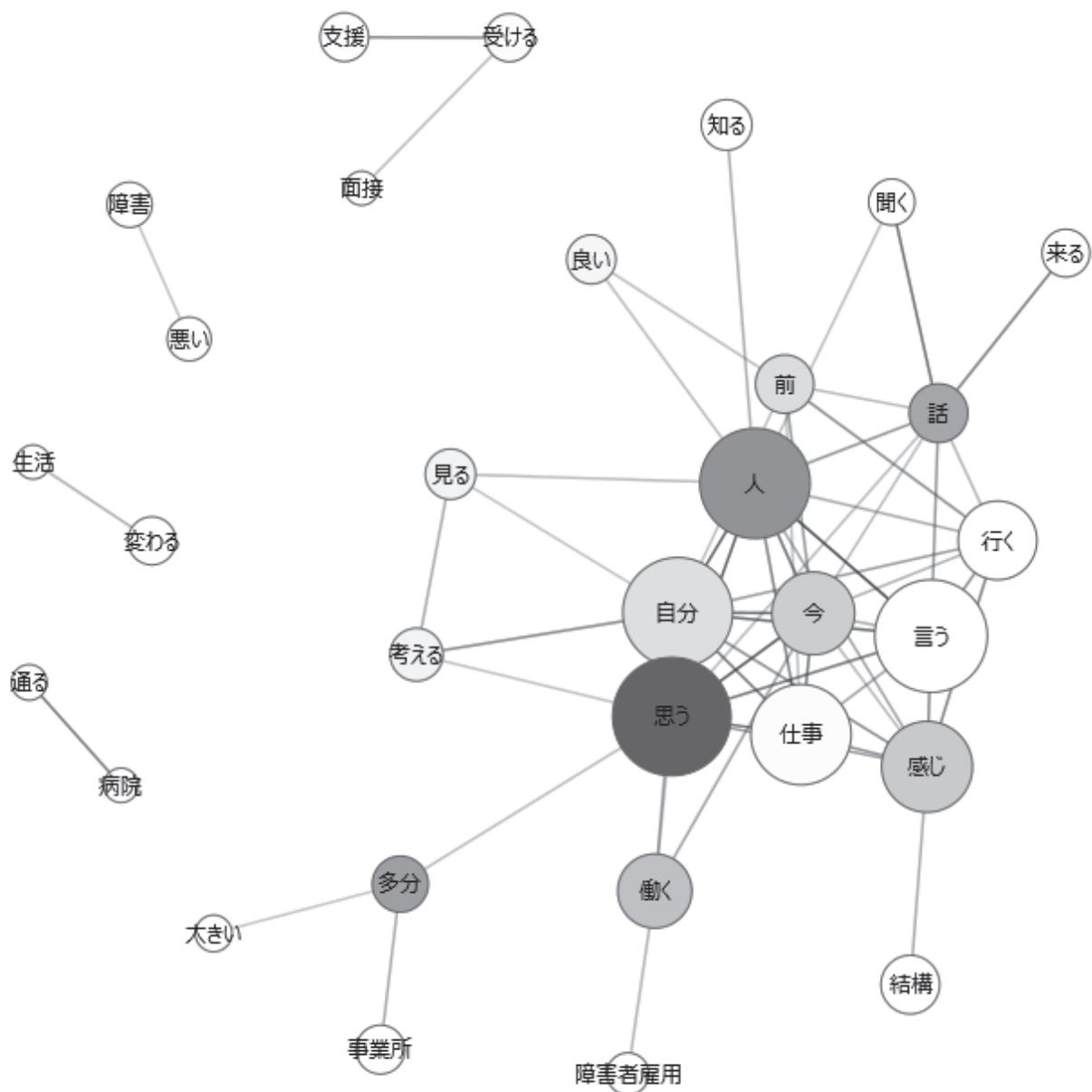


図1 全体の共起ネットワーク

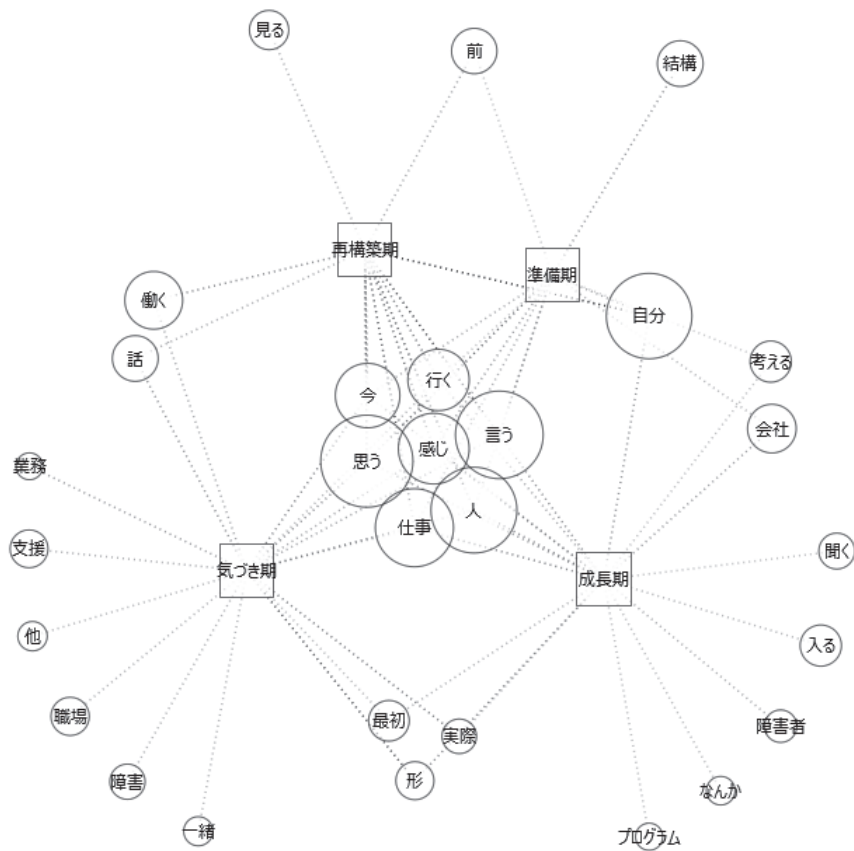


図2 リカバリーの段階を外部変数とした共起ネットワーク

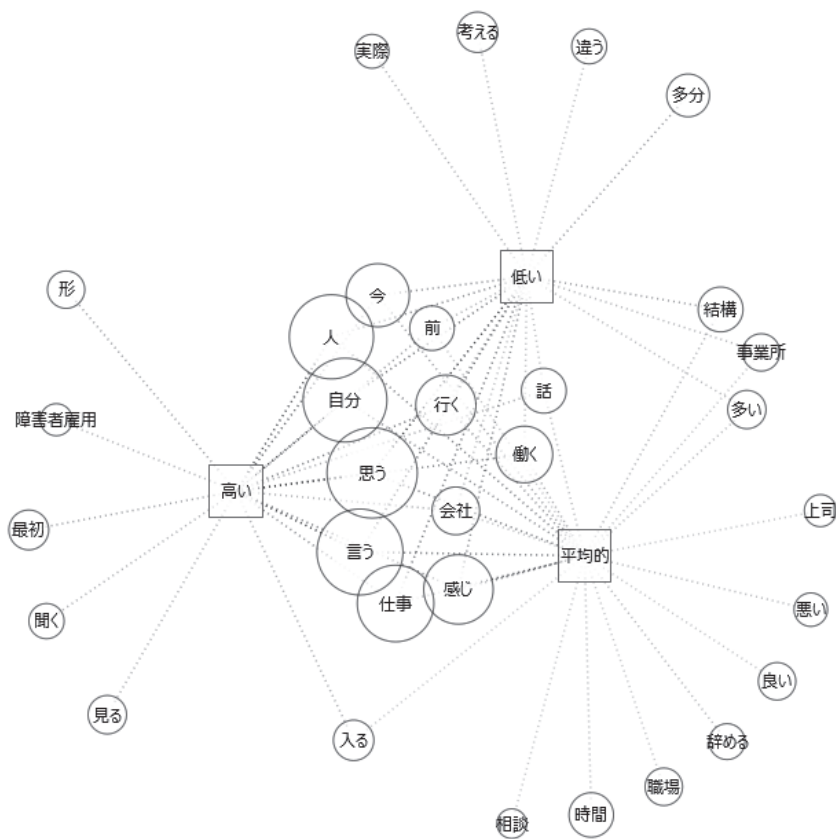


図3 ワーク・エンゲイジメントのレベルを外部変数とした共起ネットワーク

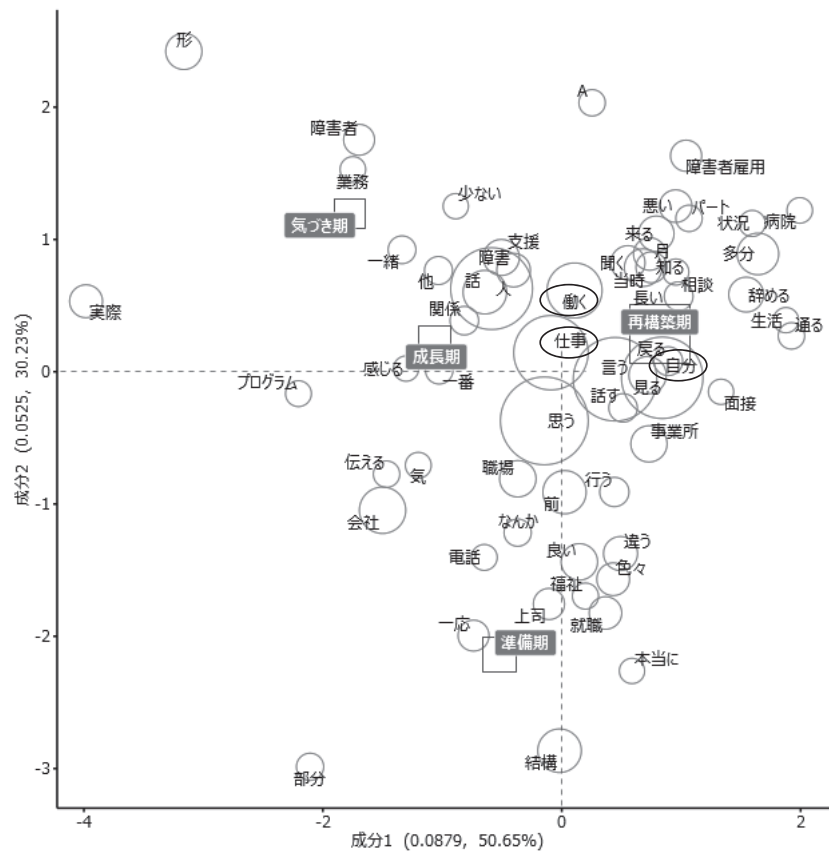


図4 リカバリーの段階を外部変数とした対応分析

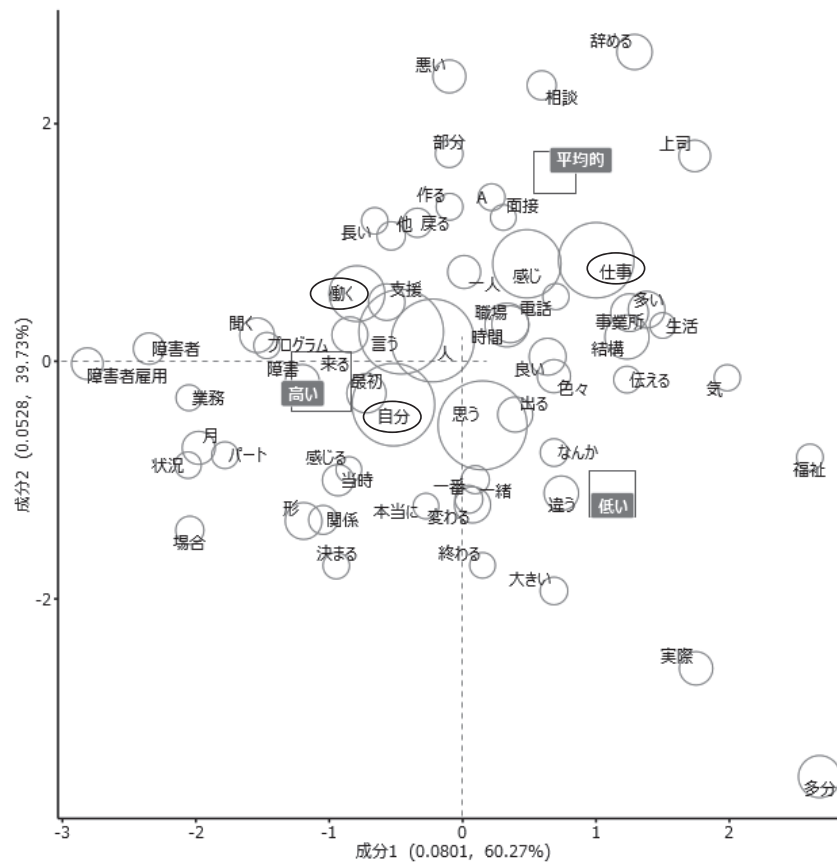


図5 ワーク・エンゲージメントのレベルを外部変数とした対応分析

表6 注目語の前後に出現頻度が高い語と出現回数

順位	働く		仕事		自分	
	語	回数	語	回数	語	回数
1	ない	31	ない	69	ない	66
2	人	18	今	33	思う	23
3	今	15	思う	16	自分	20
4	自分	12	自分	14	今	19
5	障害者雇用	11	人	13	場合	15

表7 抽出された文章の分類

<リカバリーの段階>

段階	過去の就労経験				現在の就労				就労支援				就労前後の変化				総計
	N	F	P	小計	N	F	P	小計	N	F	P	小計	N	F	P	小計	
気づき期	3	1	0	4	1	1	0	2	0	0	0	0	3	1	1	5	11
準備期	0	1	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2
再構築期	9	5	1	15	3	2	1	6	1	5	5	11	0	0	10	10	42
成長期	4	0	0	4	0	0	1	1	0	0	0	0	0	2	5	7	12
総計	16	7	1	24	5	3	2	10	1	5	5	11	3	3	16	22	67

<ワーク・エンゲイジメントのレベル>

レベル	過去の就労経験				現在の就労				就労支援				就労前後の変化				総計
	N	F	P	小計	N	F	P	小計	N	F	P	小計	N	F	P	小計	
低い	3	2	0	5	2	1	1	4	0	0	1	1	3	0	1	4	14
平均的	6	2	1	9	3	1	0	4	1	1	4	6	0	0	4	4	23
高い	7	3	0	10	0	1	1	2	0	4	0	4	0	3	11	14	30
総計	16	7	1	24	5	3	2	10	1	5	5	11	3	3	16	22	67

※N：ネガティブ F：フラット P：ポジティブ

3) 対応分析

対応分析は、クロス集計を視覚化する方法であり、基本的には2つの項目(変数)を一緒に集計し関連性を分析する手法とされている¹⁶⁾。リカバリーの段階とワーク・エンゲイジメントを外部変数として用いた対応分析の結果が図4, 5である。リカバリーの段階では、気づき期と成長期がほぼ同方向にあり、準備期、再構築期と3方向に分かれていた。一方、ワーク・エンゲイジメントでは、レベルごとの3方向に語が分布していた。

4) 語の使用法の検討

今回、注目する語として出現頻度や媒介中心性が高く、リカバリーの段階またはワーク・エンゲイジメントにおいて各段階に共通して関係している「働く」「仕事」「自分」とした。この3語は対応分析においては、リカバリーの段階では再構築期の周辺に集まっており、一方、ワーク・エンゲ

イジメントでは「働く」「自分」は高いレベルに、「仕事」は平均的なレベルの周辺に位置しているという違いがある。また、KWICコンコーダンスを用いて前後に現れる語の検討を行ったところ、いずれも、「ない」という否定助動詞が最も高く出現していた(表6)。今回、この「ない」にも注目し、①注目した3語の後に「ない」が現れる文章を抽出、②注目している語に対し否定的に使われている文章に絞る、③文章の内容をカテゴリと意味がネガティブ、ポジティブ、フラット(例：配慮条件の説明)かを判断、④リカバリーの段階、及びワーク・エンゲイジメントのレベルごとに集計した。なお、一つの文章に2つ以上の注目語が表れている場合は1つとして数えた。その結果を表7に示す。

全部で67の文章が抽出され、意味の分類としては、過去の就労経験、現在の就労、就労支援、

就労前後の変化の4つに分けられ、過去の就労体験が24 (35.8%) と最も多かった。また、ネガティブなものは25 (37.3%)、ポジティブなものは24 (35.8%)、フラットなものは18 (26.9%) であり、ネガティブな過去の就労経験とポジティブな就労前後の変化が16 (23.9%) と同数であった。

なお、リカバリーの段階別では再構築期が42 (62.7%) と最も多く、成長期ではネガティブなものは過去の就労経験のみに認められた。一方、ワーク・エンゲイジメントでは、高いレベルで30 (44.8%) と最も多く、特にポジティブな就労前後の変化が11 (16.4%) と多かった。

IV. 考察

今回、就労している当事者に対しアンケート及びインタビューによる調査を行った。考察では、量的側面と質的側面から論じ、明らかになった課題について述べる。

1) 量的側面

量的尺度であるUWES-J短縮版とSISR-Bについて相関が認められなかった。ここでまず考えられることとしては、生き活きと働いていることと、リカバリーレベルがイコールではないということである。この点は、地域で生活をしている精神疾患を有する人のリカバリーについてRASを用いた比較では就労の有無で差がないことが示されていること¹⁸⁾ や、統合失調症者のリカバリーレベルは、就労の有無や利用施設の違いよりも、他者からの情緒的支援やセルフスティグマの軽減がリカバリーを促進する可能性が示唆されている¹⁹⁾ こととも一致すると思われる。

一方、勤続年数もUWES-J短縮版及びSISR-Bとは相関が認められなかったため、生き活きと働いていることやリカバリーレベルを促進することと就労が継続することは関連が低いと思われる。本研究では15名と人数が少ないため、一般化するのは難しいと思われるが、就労に関してはいくつもの要因があり、単純にリカバリーの促進要因かを検討することは困難であることを示唆している

と思われる。例えば、先行研究^{18) 19)} では「就労の有無」は記されているが、雇用形態や業種、支援を受けての就労かについては条件に含まれていないものや、対象に一般企業での就労が含まれていないものであるため、本研究と同じとは言えない部分が残っている。今後、雇用形態も含めた詳細な条件を検討したうえでの比較検討が必要であると思われる。

2) 質的側面

今回、テキストマイニングを実施し、リカバリーの段階及びワーク・エンゲイジメントのレベルを用いて検討を行った。頻出語および特徴語、共起ネットワークや対応分析をもとに「働く」「仕事」「自分」の3語に注目し、これらの語の前後で一番出現していた「ない」を用いて文章を抽出し、内容及び意味を3つに分類した。ワーク・エンゲイジメントは仕事にエンゲイジしている状態で情熱を持って働いている状態とされ⁹⁾、高いレベルの場合は、現在、仕事を生き活きと取り組むことができているため、就労前後の変化がポジティブになっていることが考えられる。他のレベルでは現在の就労に関するネガティブな発言がある点から、現在の仕事においてワーク・エンゲイジメントを高めるための資源が不足している状態にあることが推測される。

一方、リカバリーの段階では、成長期において過去の就労経験を除き、ポジティブな発言のみ認められた。SISR-Aの成長期の教示文章は「今は、自分の健康や人生をコントロールしていると感じています。とても調子が良く、将来は明るく見えます。」となっている¹¹⁾。このコントロールができる感覚があるため、現在の就労や就労による変化についてポジティブな意味づけができている可能性が考えられる。再構築期においては就労前後の変化はポジティブなものであるが、就労支援や現在の就労に関して、ネガティブな発言が認められている。再構築期の教示文は「今は、わりとうまく病気に対処することができます。調子が良く、将来についてはかなり前向きに感じています。」

である¹¹⁾ため、成長期同様ポジティブに考えることはできるが、仕事に関するコントロール感は少ないことが考えられ、結果、就労支援に関する発言にもつながっていると推察される。

以上のことを踏まえると、リカバリーに関しては自分がコントロールできている感覚を持っているかが重要であり、仕事においても同様の感覚が持っているかが関連すると思われる。一方ワーク・エンゲイジメントでは仕事のコントロールはワーク・エンゲイジメントを高める仕事の資源のリストの作業・課題のレベルに含まれており²⁰⁾、他の資源の影響を検討する必要があると思われる。

3) 本研究の課題と限界

本研究では、リカバリーと就労との関係を明らかにするために量と質の両面からの検討を行ったが、関係性を明らかにするまでには至らなかった。しかし、この両者の関係性を検討する上での課題を明らかにすることができたと思われる。

1点目は、就労に関するとらえ方である。今回の研究協力者は調査時点で就労している者であるが、一般企業への就労または自営を行っている者である。また、一般企業への就労に関しても、障害者雇用で勤務するものから、障害を開示せずに就職した者も含まれている。量的な側面でも触れたが、就労とリカバリーとの関係を検討するためには就労に関する定義や条件を精査する必要があると思われる。

2点目は、「I. はじめに」でも説明をしたがリカバリーとは一言で定義されにくく、現れ方は個々人で多様であるも、「病気や健康状態の如何にかかわらず、希望を抱き、自分の能力を発揮して、自らが選択できるという主観的な構えや指向性」ともされている²⁾。この点を踏まえると、インタビューで得られた内容が研究協力者のリカバリーを示しているのかどうかについて客観的に判断することは困難である。今回は量的な尺度を利用しリカバリーの状況を示そうとしたが、このリカバリーに関する尺度についても、評価内容や評価しうるリカバリーの側面はそれぞれの尺度ごと

に異なっており、目的に応じて適切な評価尺度を選択する必要性が指摘されており²¹⁾、今回使用した尺度が適切であったか、また、就労との関係性を検討するにあたり適切な尺度の種類について検討する必要があると思われる。

3点目として、本研究では就労継続期間がリカバリー尺度やワーク・エンゲイジメントと相関を示さなかった。仕事を続けていると当然、順調な時もそうではない時もあり、どの時点で研究に協力してもらうかでも、リカバリー尺度の値は変わる可能性があると思われる。今回は、ワーク・エンゲイジメントを指標とした結果、SISR-Bとの相関は認められなかったが、SISR-Aの成長期の2名はワーク・エンゲイジメントも高く、先のリカバリー尺度を用いる際の選択の課題もあるが、活き活きと働くこととリカバリーに関してなんらかの関係性があると推測される。しかし、リカバリーした結果、活き活きと働いているのか、活き活きと働くことでリカバリーするのかについては未確認であり、今後検討する必要があると思われる。

なお、本研究の限界として、量的側面でも述べたが人数が少なく、本研究結果を一般化するのは難しいと思われる。また、データの欠損のため使用できなかった尺度があるため、リカバリー尺度の適正さや就労に関する満足度について検討が行えなかった。今回、量と質の両面から検討するためにテキストマイニングを用いたが、異なる質的な研究手法を用いて分析することで、より深い研究協力者の意味づけを確認することができる可能性もあると思われる。

V. 結語

本研究で働くこととリカバリーの関係性を検討するには不十分な点があったが、いくつかの課題を提起することに至った。伊藤は、リカバリーは自らの体験であると同時に、社会的な体験、つまり、他者との関りがあって、はじめて自分の人生についての希望が取り戻せたり、生活を維持していく動機が見出せるとし、その人の価値や社会的

な役割というのは、関心ある他者の存在があって生まれるものとしている²²⁾。これを踏まえ、仕事とリカバリーの関係性を検討する上で、就労している当事者の情緒的支援（何が支援になっているのか、どのような他者が担っているのか）の側面からも考える必要があるのではないかと思われた。

謝 辞

本研究に関し、多大なる助言、資料提供をいただきました。東京大学大学院医学研究科精神看護学分野宮本有紀先生、国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域・司法精神使用研究部山口創生先生に深く感謝いたします。

文 献

- 1) 野中猛：【リカバリー再考：生きがいを支援する】障害論から見た我が国におけるリカバリー論の展開。精神科臨床サービス10：446-451, 2010.
- 2) 野中猛：リカバリー概念の意義。精神医学47 (9)：952-961, 2005.
- 3) 地域・司法精神医療研究部：リカバリー (Recovery)：第3回改定版。国立精神・神経医療研究センター, 小平, 2018. URL: <https://www.ncnp.go.jp/nimh/chiiki/about/recovery.html>
- 4) Ragins M: A Road to Recovery. 2002. 前田ケイ監訳：ビレッジから学ぶリカバリーへの道 精神の病から立ち直ることを支援する。76-78, 金剛出版, 2005.
- 5) ゼンセイネット：第3章 [特別分析] できるリカバリー・できないリカバリー比較「最新版統計から見える処方現状～できるリカバリー・できないリカバリー」, 7-22, NPO法人ウエンディ, 2015.
- 6) Connell M, King R, Crowe T: Can Employment Positively Affect the Recovery of People with Psychiatric Disabilities? Psychiatric Rehabilitation Journal35 (1) :59-63, 2011.
- 7) Fossey EM, Harvey CA: Finding and sustaining employment: A qualitative meta-synthesis of mental health consumer views. Canadian Journal of Occupational Therapy77 (5) :303-314, 2010.
- 8) Shimazu A, Schaufeli WB, Kosugi S, Suzuki A, Nashiwa H, Kato, A, Sakamoto M, Irimajiri H, Amano S, Hirohata K, Goto R, Kitaoka-Higashiguchi K: Work Engagement in Japan: Validation of the Japanese Version of the Utrecht Work Engagement Scale. International Association of Applied Psychology, 57 (3) :701-716, 2008.
- 9) Schaufeli W B, Dijkstra P: Engaged at work.2012. 島津明人, 佐藤美奈子訳：ワーク・エンゲイジメント入門, 1-38, 星和書店, 2012.
- 10) Chiba R, Miyamoto Y, Kawakami N: Reliability and validity of the Japanese version of the Recovery Assessment Scale (RAS) for people with chronic mental illness: Scale development. International Journal of Nursing Studies 47:314?322, 2010.
- 11) 千葉理恵, 宮本有紀, 川上憲人：地域で生活する精神疾患をもつ人の, ピアサポート経験の有無によるリカバリーの比較。精神看護38 (2) :48-54, 2011.
- 12) Chiba R, Kawakami N, Miyamoto Y, Andresen R: Reliability and validity of the Japanese version of the Self-Identified Stage of Recovery for people with long term mental illness, International Journal of Mental Health Nursing, 19 (3) :195-202, 2010.
- 13) Resnick SG, Bond GR: The Indiana Job Satisfaction Scale: Job Satisfaction in Vocational Rehabilitation for People with Severe Mental Illness. Psychiatric Rehabilitation Journal25 (1) :12-19,2001.
- 14) いとうたけひこ：テキストマイニングの看護

- 研究における活用. 看護研究45: 475-484, 2013.
- 15) 末吉美喜: “第5章KH Coderで伝える! 分析アウトプット5選” テキストマイニング入門 ExcelとKH Coderでわかるデータ分析: 63-136, 東京, オーム社, 2019.
 - 16) 牛澤賢二: “第4章第1段階の分析1: 抽出語の分析” やってみようテキストマイニング 自由回答アンケートの分析に挑戦! 39-75, 東京, 朝倉書店, 2018.
 - 17) 樋口耕一: KH Coder 3 リファレンス・マニュアル2020年5月11日 (KH Coderソフトに添付)
 - 18) 菅沼映里, 新宮尚人: 地域に暮らす精神疾患を有する人のリカバリー作業遂行, 重要活動項目の特性比較-. 作業療法33 (1): 24-35, 2014.
 - 19) 岡本隆寛: 統合失調症者の利用施設および就業状況の違いや情緒的支援, セルフスティグマとリカバリーとの関連性. リハビリテーション連携科学21 (1): 11-22, 2020.
 - 20) 島津明人: ワーク・エンゲイジメント ポジティブメンタルヘルスで活力ある毎日を. 第1部第2章ワーク・エンゲイジメントの機能. 44-70, 東京, 労働調査会, 2014.
 - 21) 千葉理恵, 金原明子, 山口創生, 宮本有紀: パーソナル・リカバリーおよびリカバリー志向性を評価する日本語尺度の系統的レビュー. 精リハ誌24 (1): 60-71, 2020.
 - 22) 伊藤順一郎: エンパワメントあるいはリカバリー概念の活用. 家族療法研究22 (3): 214-218, 2005.

A Preliminary Survey on Work and Recovery:

Consideration of Both Quantity and Quality

OHKAWA Hiroko, ENDO Yoshihiro, SHIOZAWA Madoka, FUNAMOTO Shuhei
and HONDA Toshinori

Abstract: In recent years, work has been considered as one of the objective recoveries in personal recovery. However, in previous studies, the results of quantitative and qualitative methods have differed in the relationship between work and recovery. In order to examine the relationship between work and recovery from both quantitative and qualitative perspectives, we conducted a self-administered questionnaire survey and an interview survey with people with disabilities who are working.

First, UWES-J and the SISR-B were used for quantitative examination, but no correlation was found between the two. As a qualitative study, we conducted text mining of the interview content using UWES-J and the stages of recovery (SISR-A) as external variables. As a result, it was shown that the ratio of positive and negative content of the text for each level of work engagement and stage of recovery appeared differently, but the relationship between work and recovery was not directly examined. However, it was not possible to directly examine the relationship between work and recovery. In the future, three issues will be considered in examining the relationship between work and recovery: (1) how work is viewed, (2) how recovery is defined and viewed, and (3) when the research collaborators cooperated.

Keywords: work, recovery, text mining

